

好去好来の歌一首 反歌二首

八九四番

神代より 言ひ伝て来らく そらみつ 大和の国は 皇神の 厳しき
国 言霊の 幸はふ国と 語り継ぎ 言ひ継がひけり 今の世の 人も
ことごと 目の前に 見たり知りたり 人さには 満ちてはあれども
高光る 日の大朝廷 神ながら 愛での盛りに 天の下 奏したまひ
し 家の子と 選ひたまひて 勅旨 戴き持ちて 唐の 遠き境に
遣はされ 罷りいませ 海原の 辺にも沖にも 神留まり うしはき
います 諸の 大御神たち 舟舳に 導きまをし 天地の 大御神た
ち 大和の 大御魂 ひさかたの 天のみ空ゆ 天翔り 見渡した
まひ 事終はり 婦らむ日には また更に 大御神たち 舟舳に 御
手うち掛けて 墨繩を 延へたるごとく あちかをし 値嘉の舳より
大伴の 三津の浜辺に 直泊てに み舟は泊てむ つつみなく 幸く
いまして はや帰りませ

反歌

八九五番

大伴の 三津の松原 かき掃きて 我立ち待たむ はや帰りませ

八九六番

難波津に み舟泊てぬと 聞こえ来ば 紐解き放けて 立ち走りせむ